いちょう

（題字　：　6年　さいとう　しさ　）

令和２年９月１５日
No.３０ 号

山形市立第四小学校
校長　日 髙　伸 哉
＜児童数　２０５名＞
TEL 623-6019

本日(9/15)の全校朝会・校長講話から

いちょう兄弟体験学習
そして、いちょう大運動会へ
～ヤマアラシのジレンマに学ぶ～

朝夕が涼しくなってきました。蝉の声も小さくなり、夕方から夜にかけては秋の虫の声が聞こえてきます。時の流れを感じ、月日が経つのは早いなあと改めて思っています。本日の全校朝会でこんな話をしました。

先日の「いちょう兄弟体験学習」で、皆さんはどんなことを学びましたか。
翌日、振り返りの時間がありましたね。

私は、一人ひとりの振り返りの様子を、担任の先生から伺ったり、おたよりに載っていた言葉を読んだりして、嬉しくなりました。もちろん、すべての活動が上手くいったわけではないでしょう。謎解きハイキングでは道を間違えたり、質問の答えがなかなかできあがらなかったり、焼き芋づくりでは、なかなか火が付かなかったり、後片付けに時間がかかったりと、いろいろハプニングもあったことでしょう。でも、「いちょう兄弟体験学習」を通して、一人ひとりが、自分を見つめ直すきっかけとなったこと、そのことが最も尊いことだと思うのです。活動という場を通して、弱い自分やよくできた自分、今まで気がつかなかった友達のよさやすごさに気づけたことが、これからの生活に「潤い」と「力強さ」を与えてくれると思います。そう考えると、スローガンである「クルーズ班全員で楽しみ、おたがいの事を知るいちょう兄弟にしよう」が、達成できたのではと感じています。

これからも、こういう「節（ふし）＝竹の節と同じような節」をつくりながら一歩ずつ歩んでほしいと思います。

次の節は、「いちょう大運動会」ですね。コロナウイルス禍で、これまでとはちがうやり方を考えなければなりませんが、本当に大切なこと（本質）をしっかり考える点では、とても意味のあることです。いちょう兄弟みんなで知恵を出し合って、「臨機応変」に取り組んでゆきましょう。

今日は、その取り組みのヒントになるお話をします。「**ヤマアラシのジレンマ**」という話です。

寒い寒い冬の朝、二匹のヤマアラシがいました。寒くて孤独で、ひとりぼっちでいるのは耐えられません。そうしたときには、ごく自然に近づき体を寄せ合います。そして相手の暖かさを自分に取り入れたり、自分の暖かさを相手にあたえたりします。ところが、ヤマアラシの体には鋭いとげがあります。そのため、近づき過ぎると、相手のとげが自分を刺して痛いのです。見たら、相手も痛がっています。ああ、そんなに近づいたら痛いぞと思って離れます。離れると確かに痛みはありませんが寂しくなります。寒くなります。孤独です。だからまたそろそろと近づきます。そしてまた、あんまり無謀な近づき方をすると、自分が苦しくなってきて、また離れます・・・。ジレンマですね。

相手を傷つけない、ちょうどよい距離感を保つために、くっついたり離れたりして、適度な距離感を探ったというお話しです。友達とは、近づきすぎるとケンカになるし、離れると寂しいし、どうすればいいのと悩みますね。しかし、この悩みが実はとても大切なのです。悩みながら、「ちょうどよい距離感をつかんでいく」こと。これが、適度な距離を知るための一番大切な方法なのです。経験を通して得た力は、本物になり「生きて働く力」になります。いちょう大運動会に取り組む中で、いちょう兄弟や同じ学年のお友達との関係に悩むこともあるでしょう。でも、めげないでほしいのです。この「ヤマアラシのジレンマ」の話を思い出しながら、ちょうどよい距離感を探り続けてほしいのです。そして、いちょう大運動会の後には、さわやかで気持ちのいい関係になっていてほしいのです。

児童会目標の「人のことを自分のこととして考える」ことも、この適度な距離感を保つことから見えてくるものもあると思います。これからも、みんなで「いちょうの子ども（心の豊かな子ども・健康でたくましい子ども・意欲的に考える子ども）」を目指して頑張ってゆきましょう。

お話しを終わります。

「ヤマアラシのジレンマ」は、ドイツの哲学者、アルトゥール・ショーペンハウアーの寓話です。主著は「意思と表象としての世界」（Die Welt als Wille und Vorstellung 1819年）。森鴎外や筒井康隆など多くの作家に影響を及ぼしたと言われています。